

# プラスチック類混焼率について

(上田クリーンセンターのごみ物理組成分析結果(乾ベース))

別紙②

○上田クリーンセンター 組成分析測定値(年6回測定の平均値)

	三成分(%)			物理組成(%)					
	水分	総固形分		紙・布類	木・竹類	合成樹脂・ゴム・皮革類 <sup>注2)</sup>	厨芥類	その他	不燃物類
		可燃分	灰分						
21年度	31.0	61.3	7.7	55.1	16.0	4.1	20.3	1.2	3.4
22年度	21.9	69.6	8.5	56.0	23.6	6.8	9.3	1.1	3.3
23年度	25.4	66.7	7.9	53.7	23.4	5.0	13.5	1.5	3.0
24年度	28.4	63.1	8.5	53.7	19.1	4.0	20.0	0.7	2.6
25年度	44.8	49.0	6.2	56.9	15.6	4.8	20.0	0.5	2.3
26年度	42.0	50.7	7.3	55.4	15.4	4.6	22.1	0.2	2.5
27年度	41.7	51.9	6.4	56.9	10.7	5.1	24.7	0.1	2.5
28年度	65.3	31.2	3.5	44.1	10.7	4.5	33.9	5.7	1.2
29年度	67.5	29.0	3.6	30.6	13.8	6.0	42.8	6.0	0.7
30年度	47.2	47.2	5.6	56.3	7.7	19.6	12.6	3.4	0.4
元年度 <sup>注1)</sup>	49.4	46.0	4.6	60.0	9.8	4.9	18.9	5.5	1.0
平均	42.2	51.4	6.3	52.6	15.1	6.3	21.6	2.4	2.1

注1)「元年度」の測定値は、4月に実施した分析値。

注2)ごみ処理広域化計画では「合成樹脂・ゴム・皮革類」を「プラスチック類」としている。

## ○考 察

- ・ 合成樹脂・ゴム・皮革類について、平成29年度までは4.0%~6.8%で推移していたが、平成30年度においては19.6%と急増しており、今後の推移を注視していく。
- ・ 平成11年3月に策定した第一次ごみ処理広域化計画においては、当時の時代背景から、炉の損傷を助長する可能性のある、高カロリーであるプラスチック類混焼率について、「5%以下に統一する」としていた。
- ・ プラスチックごみは、現在、海洋プラスチックとして全世界的な課題となっており、今後も啓発活動等により分別徹底の取組を展開していく。

## ○ごみ組成分析方法

1	試料の採取	ごみピット内のごみを十分混合したのち、200kg程度の試料を採取する。
2	試料の調整	採取した試料を、スコップなどで十分混合し、四分法により数回縮分し、試料として5～10kgを採取する。
3	測定分析	
(1)	単位体積重量	2の試料を容器に入れ重量を測定する。
(2)	水分の測定	(1)の試料を乾燥機を用いて、105℃±5℃で乾燥する。乾燥前の重量から乾燥後の重量を引いた値が水分量。
(3)	ごみの組成分析	(2)で乾燥させた試料全量を6組成に分類し、各組成ごとに秤量し重量比(%)を求める。
(4)	灰分の測定	(3)で分別した組成のうち、不燃物類以外について、各組成ごとに破碎した後、その一部を105℃±5℃で2時間加熱する。その後電気炉を用いて800℃で2時間強熱し秤量する。

## ○第3次ごみ処理広域化計画のプラスチック類混焼率の数値について

- 第3次ごみ処理広域化計画における、平成26年度のプラスチック類混焼率について誤りがあり、この場にて訂正をお願いいたします。大変申し訳ございませんでした。

### 【プラスチック類混焼率 訂正後の数値】

上田クリーンセンター : 4.6%  
 丸子クリーンセンター : 7.1%  
 東部クリーンセンター : 3.1%